

政宗はそのまま幸村の首を伝い、肩から着物の衿を割った。

「独眼竜殿？」

「政宗でいい。これからツガイになるんだ。野暮は無しだぜ。」

バサツと幸村の上半身の着物を脱がす。咄嗟の事に幸村の体は強張ったままだった。

「えっ、ちよっ、ツガイ？」

「ああ、虎と竜は番い、子を成す。天下も取れる合いの子をな。昔会った時はあんまりにも幼かったからな、勘弁しておいてやった。十年以上待ったんだ。もう、いいだろ？」

幸村の肩には先日、政宗がつけた傷が癒えていない。

政宗は包帯の上から幸村の体の線をなぞる。

「いや、某、…自分が虎とは、思えませぬ。幸村は人でございますれば。」

幸村は政宗の手から逃れようと後退するが、政宗にその手を捕まれ引き寄せられる。

「いや、アンタは虎だ。俺が間違えるわけがねえ。それに。」

幸村の肩口の包帯に政宗は顔を埋め、幸村の背中に爪を正中線を描くようにスウツと下ろした。

「！」

幸村の体の毛が全身逆立つのが分かった。

そして、その感覚は次第に大きくなり、逆立った毛がいつの間にか、虎の体毛を成した。

「これはっ…。」

幸村は自分の体を咄嗟に見るが、毛が逆立つのを止めるとその体の毛も消え、再び元の体に戻った。

「な？俺と違って自分の意思で轉身することはできねえが、触れ合えば、猛る。」

政宗は手早く幸村の袴の腰紐を解くとそのまま前を肌蹴させた。

「ちよっ、ちよっと待ってください。」

蒼の陣羽織を政宗が脱いでいると幸村は政宗の肩をグイッと押した。

「An?なんだよ。」

「某が虎なのは百歩譲って理解いたしました。ですが、なぜ、この様な…。」

政宗は幸村の答えを聞く前に幸村を自分の陣羽織の上に寝かせた。

「なぜって、子供作るんだ。まぐわうに決まってるんだろ？」

「なっ、まぐわっ…。」

政宗の口から出た破廉恥な言葉に幸村の顔は一気に上気した。

「そ、某達は男でござる。」

聞ごとに疎い幸村でもそれだけは分かる同性同士で、子が成せるはずがない。

「人はな。俺達には関係ねえよ。」

あつという間に幸村の小袖の前を開き、下帯を引き抜いた。

「ああっ」

外気に晒された性器を隠すように幸村は足を組んだ。

「見せろよ。」

幸村の膝を掴んで政宗が押し掛かった。

「政宗っ殿…。」

「…っあ。」

何か政宗は思い出したのか、パツと手を放してしまった。

「？」

幸村もその前触れの無い所作に疑問を抱き、小袖の前を閉じ、体を起こした。

「忘れてたぜ。アブネエ、アブネエ。昔、俺を助けてくれた札をまだしてなかった。…幸村。お前の望みをかなえてやる。」

急に真剣な面持ちになった政宗の顔に幸村の心臓は不意に脈を打つ。

「そ、某…。」

願いは決めていた。だが、今、ここでソレを口にするのか。口にしていいものか。

「某、…子が大勢欲しいでござる。」